

みれんの滝

アオイケ

ミズモリ

青年登山家

おじさん

おじいさん

雪山を進む青年登山家、遠くに見える山頂にスマホをかざしている

高山のため、息が上がっている

青年登山家「みなさん、えー……、いま、七千メートルの地点に、います。天気が荒れたので、吹雪がやむのを待って、一時間ほど前に、また、登り始めました。雲を超えて……、ようやく太陽が見えました」

青年登山家、スマホで周囲をぐるりとゆっくり撮りながら

青年登山家「……今、ここには、何の音もありません」

青年登山家、苦しい呼吸を整える

青年登山家「今まで、応援や叱責の、たくさんのお声がけ、ありがとうございました。僕のおこなっていることには、賛否両論があることと、承知で、それでも意味のあることだと思って、これからも、頑張っていこうと思います」

背戸峨廊（せどがろ）の登山道、入口付近で試し撮りをするミズモリと、周囲を見て回るアオイケ

ミズモリ、煉瓦造りの柱を見上げ、

ミズモリ「ああ、これが線路だ、ですよ、あっちがいわきで」

アオイケ「あ、本当ですね、上が」

ミズモリ「ええ」

ミズモリ「アオイケさん、ちょっとその煉瓦のところに立ってもらえませんか、そう、手は添えなくていいです、通り過ぎる風にして、ええ」

ミズモリ、シャッターを切る

ミズモリ、荷物の中から簡易的に梱包されたヘルメットを取り出す

ミズモリ「次はこれをかぶって撮ってみましょう」

アオイケ「すごいですねこれ、軽い！」

ミズモリ「ええ、PETZL（ペツル）のシロッコという製品です、世界一軽いですよ、Sサイズだと百六十グラムしかありません」

アオイケ「製品紹介もミズモリさんが」

ミズモリ「ええ、私が書きますよ。書くのも私、撮るのも私です。編集はさすがにチームを組んでますが」

アオイケ「ああ」

ミズモリ「小さな編集社なんでね」

アオイケ「いえ」

ミズモリ「進みながら撮影して、キリのいいポイントでインタビューをさせてください」

アオイケ「ええ」

アオイケ、シロッコを頭に装着する

ミズモリ、装着するところから、動きを追うように連写する

背戸峨廊、上流

左右に崖が続くため梢が高く、近くに滝の落ちる音が聞こえる

ミズモリ、アオイケを適当な岩場に座らせ、カメラをセットしはじめる

ミズモリ「いやあ、なんだかんだで、登ってしまいましたね」

アオイケ「ええ」

ミズモリ「疲れていませんか」

アオイケ「平気です、慣れてます」

ミズモリ「さすがですね、鎖場の進み方も精確で」

アオイケ「ありがとうございます」

アオイケ「さっきの生き物は、なんだったんでしょうね」

ミズモリ「ピーピー鳴いてましたね、親を呼んでいたのか」

アオイケ「あれって、カワウソなんですか」

ミズモリ「どうでしょうね、おとなの姿なら見分けがつくんですが」

アオイケ「すごく小さかったから」

ミズモリ「ええ」

アオイケ「どうして水際にへばりついてたのか、わからなかったですね、あの子がいま安全な状態なのか危険な状態なのかも、私にはわからなかった、どうしてほしかったのか……」

アオイケ、勢いのある水流の音を聞きながら、岩場を囲む木立を見上げる

アオイケ「ここで沢のコースはおしまいなんですか」

ミズモリ「ええ、あとはあの梯子を登りきれば戻りの登山道になります」

ミズモリ、崖にかかった梯子を指差す

アオイケ、ミズモリの指した方向を見、それから別の方向に目をやる

アオイケ「奥にあるのが、三連の滝ですか」

ミズモリ「ああ、ええ、そうなんです、あれね、三連と書いてみれんと読まれているんですよ」

アオイケ「未練の滝……」

ミズモリ「ええ」

ミズモリ、アオイケに直面して座る

ミズモリ「それでは」

アオイケ「はい」

ミズモリ「ええと、ふだんどれくらいの頻度で山に登られますか」

アオイケ「そうですね、仕事とプライベートをひっくるめると、月に五回くらいは登っています。まあ登山じゃない旅行雑誌の撮影なんかも入るし、そういうときはふもとで撮って帰ることもよくあるので、しっかり登山することはそこまで多くはありませんけど」

ミズモリ、メモを取りながら、

ミズモリ「登るときは高山が多いですか」

アオイケ「はい、先月は西大巔（にしだいてん）に登りました」

ミズモリ「ああ、あそこは二千メートル近くはありますね。途中、急坂になっている道があったでしょう、そこを抜けてから福島の方角を見ると、安達太良山と磐梯山が見えます」

アオイケ「見ました見ました、きれいでした」

ミズモリ「福島の山と言えば磐梯山とか吾妻連峰なんかのね、標高が高くて百名山にも選ばれているようなねえ、山が人気ですけど。駒ヶ岳とかね」

アオイケ「ええ」

ミズモリ「みんなやっぱり内陸と言うか、仲通りより向こうと言った感じで、こちら側にあるのはやはり低山ばかりになりますね、この背戸峨廊（せどがろ）も七百ちょっとしかないですしね」

アオイケ「そうなりますよね、でも、こっちはこっちで楽しいです」

ミズモリ「他にはどこへ行かれましたか」

アオイケ「撮影でよく行くのは、霧ヶ峰とか、尾瀬とかですね、ロケーション的に」

ミズモリ「ああ、見晴らしが良いからですか」

アオイケ「それもあるし、たぶん一種類の花がいつせいに咲くのが、わかりやすい画が撮れて良いんだと思います、霧ヶ峰なんかはあの、ニッコウス…ギ……」

ミズモリ「ニッコウキスゲですか」

アオイケ「それです」

ミズモリ「ああ、ありますね、咲きますね」

アオイケ「はい」

ミズモリ、長めにメモを取る

ミズモリ「仕事をするうえで、ふだんから気を使っていることなどはありますか」

アオイケ「食生活と運動ですね、登るための筋肉は維持しつつプロポーションもキープしないといけないので、ちょっと気を抜いてサイズアップしてしまっても、慌てて痩せようとするともバランスが崩れます」

ミズモリ「では、高タンパク低カロリーな食事を」

アオイケ「そうですね、あ、でも登る前にはしっかりカーボ・ローディングしています」

ミズモリ「ああ、素晴らしいですね」

ミズモリ「山岳での撮影に特化したモデルさんというのは、ほとんど他にいらっしやらないと思うのですが、山専モデルになろうと思ったきっかけは何かあるんですか」

アオイケ「うーん」

アオイケ「そうですね」

アオイケ「忘れられない人がいて」

ミズモリ「はあはあ」

先を続けないアオイケを促すように、

ミズモリ「ご友人ですか」

アオイケ「友人……では、ないですね」

ミズモリ「ああ、じゃあ何か、著名な方ですか」

アオイケ「そういうことでもなく」

ミズモリ「はい」

ミズモリ「……命の恩人とか」

アオイケ、吹き出す

アオイケ「ごめんなさい」

ミズモリ「いえ」

アオイケ「なんて言ったらいいのか」

ミズモリ「はい」

アオイケ「その人とはSNSで知り合って、一度だけセックスをしました」

ミズモリ、アオイケを見る

すぐにメモを取る

アオイケ「ホテルに行く前にコーヒーを飲んで、ちょっとおしゃべりをしたんですけど、そこでいろいろなお話をしたんですけど、そのときに彼が、冬山に登るのが好きだと言っていて」

ミズモリ「ああ、ね、冬山に」

アオイケ「そのことが後から後から印象深くなっていったんです。この体が雪の山を登るのかと思うとたまらなくなつて。ネックウォーマー越しに真っ白な息を吐きながら登るのかつて、たまらなくなつて」

ミズモリ、メモを取る

アオイケ「彼のアカウントはその後すぐに消えてしまったので、会う手段はなくなりました。連絡先も交換せずに別れたので」

ミズモリ「何も手がかりがないんですか」

アオイケ「何もありません」

アオイケ「何ひとつ手がかりを残さないのに、印象ばかり深く残していった…。すごい人だと思いました」

アオイケ「それで、当時から私モデルをしてたんですけど、自分にできることで彼に繋がることは何だろうと考えたら、そうだ、山岳専門のモデルになってそういうメディアに露出する機会が増えれば、いつか彼の目に留まることあるんじゃないかと思ったんです」

ミズモリ「はあ、……ああ、ああなるほど」

アオイケ「……最低だと思って」

ミズモリ「相手の方を」

アオイケ「いえ、自分が」

ミズモリ「アオイケさんがですか」

アオイケ「ミズモリさんは、彼に罪があると思いますか」

アオイケ「彼は私とセックスをしようと思って私と会って、セックスをして、セックスが終わったから家に帰ったんです。それに比べたら自分はなんて欲深いんだろうと思って。一度寝ただけで、何度もその日のことを思い返して。山に登っている姿を見たいと思ったり、いつかまた会えるんじゃないかと今も思っている」

アオイケ「なんて中途半端で、欲ばかり深いんだろうって」

ミズモリ、メモを取り、しばらくじっとする

ミズモリ「書けませんね、これは」

アオイケ「記事には」

ミズモリ「ええ」

アオイケ「そうでしょうね」

アオイケ、水のせせらぎに耳を澄ませる

ミズモリもそれにならう

遠くで鳥がさえずる

ミズモリ「……今のはアオゲラですね」

アオイケ、手のひらを上にして軽く掲げ、ゆっくりと横方向に動かす

アオイケ「事後に」

ミズモリ「え」

アオイケ「事後です」

ミズモリ「ああ、事後に」

アオイケ「こうやって、指の背で、私のおしりから背中にかけて撫でて、ふだん外を出歩いたりしないでしょ、と彼が言いました。私は、どうしてですか、と聞きました」

アオイケ「肌がきれいだから」

アオイケ「その人はそう言ったんです。ゆったりとした口調で」

アオイケ「そんな人が、冬の山に登るのが好きだなんて言う」

アオイケ「最近、亡くなったじゃないですか、若い登山家で、単独でエベレスト登頂しようとしてた方」

ミズモリ「ああ、話題になりましたね」

アオイケ「あの登山家の記事を読むたびに、なんか、彼のことが重なって……。指がほとんどなくなってる写真とか見て、胸が溢れそうになるんです。若い登山家の訃報に胸が痛むのか、彼の安否を想って胸が苦しいのかわからなくなります」

ミズモリ「あの方の記事、今月号にも載せますよ、山岳保険の紹介にからめてですが」

ミズモリ「それから、八幡平のブナの原生林を四十年撮り続けている写真家さんがいまして、望月さんて人、彼のブナの写真と紹介を少しね…」

ミズモリ「それから北アルプス特集ですね、名峰・穂高岳（ほたかだけ）、劔岳（つるぎだけ）、白馬岳（しろうまだけ）」

ミズモリ「私としてはもっと地元の山の記事にしたいんですが、それでは」

アオイケ、思わず大きく息を吸い込む

黙るミズモリ

アオイケ、ゆっくり息を吐きながら

アオイケ「すみません…」

ミズモリ「そのお相手も、八千メートル級に挑むようなアルピニストなんですか」

アオイケ「日本の山しか登ったことはないと言っていました」

ミズモリ「それなら、凍傷で指を失うことはまずないでしょうね」

アオイケ「そうですね」

アオイケ「でも、たまたま手に取った山雑誌に、「ただそこにいるだけで死ぬるのが冬の山だ」と書いてありました」

ミズモリ「私もそれ読みましたよ、単独登山と冬山登山の遭難対策特集が、ずいぶん詩的でカッコいい雰囲気ですとめられているなあと思いました」

アオイケ「私は、胸が裂けそうでした…」

ミズモリ「アオイケさん、私ね、友人を他殺で失っているんですよ」

アオイケ「え」

ミズモリ「旅行中にね、金銭目的で、路地裏に連れ込まれてね、首しめられて死にました。発見されたのは死後二日くらい経ってからのことだったって聞きましたよ。何も、とくべつ治安の悪い場所を興味本位で歩いていたとかじゃあ、ないのにねえ」

アオイケ「そうなんですか……」

ミズモリ「その事件とあまり遠くないタイミングで、もうひとり別の友人も亡くなったんですがね。そいつは酒の飲み方が悪くて、酔っ払って地面に倒れた状態で吐いたりしたんでしょうかねえ…、その、戻したもので喉を詰まらせてね、窒息死しました」

アオイケ「ああ……」

ミズモリ、アオイケを見て少し笑う

ミズモリ「でもそっちのほうが、首絞めて殺された人より、軽い感じがしたでしょう。まあ、私の話し方のせいもあるでしょうが」

アオイケ「え、……あ、いや」

ミズモリ「あとね、たとえば私あれ苦手なんですよ、ほら、あの、ご存知じゃないかもしれないけど、ドキュメンタリー映画にあるんですよ、農家のね、お父さんが、風評被害で首吊っちゃって、後継いだせがれが頑張るっていう、そういう映画があるんですけどね」

アオイケ「はあ」

ミズモリ「まあ亡くなった人は気の毒ですよ、本人が悪いわけじゃないし」

ミズモリ「でも事業が立ち行かなくなって首吊る人間なんて他にもたくさんいるでしょう、日本中に」

アオイケ「ああ、そうですね…」

ミズモリ「世間に注目されたり取り上げられたりする死に方というのがあって、そうじゃない死に方がある」

ミズモリ「アオイケさん、山で年間何人の死者が出ているか、ご存知ですか」

アオイケ「いいえ」

ミズモリ「死者・行方不明者合わせてほしい一年あたり三二〇人弱です。そうすると、一日にひとり亡くなってちょっと休みがあるくらいですかね、そう考えると薄ら寒いですね」

ミズモリ「こんな話もありますよ。死亡事故を数え始めた一九三一年から二〇一二年までで、世界でもっとも人が死んでいる山は、なんと日本にあります。新潟県と群馬県の県境にある谷川岳という山なのですが、標高は二〇〇〇メートルに及ばないにも関わらず、これまでに八〇〇人以上の死者を出していて、これはエベレストを含む八〇〇〇メートル級の山々、全一四座の死者数の合計を上回ります」

ミズモリ「怖いですね」

ミズモリ「この背戸峨廊にしても、あっちの二ツ箭山にしても、ひんぱんに死亡事故が起こってしまして、高山に比べて低山は登山者の数が少ないから登山道が成熟しにくいんです、そのうえ低い山だからといって自治体も登山者自身もあまり危機感を持たなから、かえって滑落や遭難が多くなるんですね」

ミズモリ「私が言いたいのは、まあ、山で人は死にます。それはどうしようもない。じゃあなんで人は山に登るんでしょうね。みんななぜかけっこう気軽に登ってます。死ぬかもしれないのに。でも、じゃあ、あるいは旅先で殺されるのを危ぶんで家にこもったり、嘔吐で窒息するのを怖がって酒を断つ人はいるんでしょうかね。たぶん、いませんねなかなか」

ミズモリ「死んでほしくないからといってその人が山に登ることを嫌いますか。それはできませんよね、アオイケさんご自身も登るんですから、それでは理屈が変です。私、アオイケさんはとても堅実なやり方で登山をされていると感じました。同じハイカーとして、その方の登山意識もきつと高いものだと信じているしかないんじゃないかなあ」

アオイケ「……信じてどうなるんですか、もう会えないのに」

ミズモリ「あ、やっぱり会えないって思ってるんですね。だったらなおのこと、信じたら楽になりますよ」

アオイケ「私は、この世界の、幸福の総量みたいなものがあるとして、私せつかく誰かを想うなら、そのための時間やカロリーが費やされるなら、その幸福の数値がちょっとでも増えたらいいと思ってるんです」

アオイケ「私が彼のことを想って苦しくなったり、心地よい瞬間を思い出したり、冬の山での身を案じたりすることには、なんというか…行き先がない。空気をかき回しているみたいなことなんです。私はそのことに疲れました」

アオイケ、ミズモリをじっと見つめる

アオイケ「私は、彼にもう一度会いたいじゃなくて、彼の記憶を誰かに上書きしてもらいたいだけなのかもしれない」

ミズモリ「そうですか…、良い方が見つかるといいですね」

アオイケ、血の気が失せる

アオイケ「新しい出会いがぜんぜん無いとかそういう話じゃ、ありません」

ミズモリ「え、ええ、それは…」

アオイケ、立ち上がり、三連の滝のそばへ

ミズモリ「…気をつけてください、去年、滝壺にひとり落ちましたから」

アオイケ、滝を見上げ、見つめる

ミズモリ、どうしていいかわからない

アオイケ「取材、終わったんですよね、…私、先に戻ります」

ミズモリ「えっ、あ、アオイケさん…！」

アオイケ、ひとり梯子を登り、登山道へ

ミズモリ、ああ、まずいまずい、などと言いながら、慌てて機材を片付け始める

アオイケ、ひとり登山道を下山し、背戸岨廊を出る

アオイケ、道端の地図を眺める

アオイケ、少し歩く

アオイケ、小屋を見つける

中ではおじさんとおじいさんが談話している

アオイケ、窓から軽く覗きつつ通り過ぎる

アオイケ、小屋のそばで腰を降ろす

時おり車が走り過ぎていく

おじさん、おじいさんが小屋の窓から顔を出す

おじさん「休んで行きなさい」

おじいさん「うん」

アオイケ「あ」

おじさん「中で休みなさい」

アオイケ「あ、ありがとうございます」

おじさん「中、入って」

アオイケ「はい」

おじさん、おじいさん、窓から首を引っ込める

アオイケ、立ち上がるも、どこから入ればいいのかわからない

アオイケ「あの……」

おじいさん、再び窓から顔を出すは何も言わない

おじさん、再び窓から顔を出し

おじさん「あっち回って、開いてるから」

アオイケ、小屋と続いている駄菓子屋の玄関から中へ入る

アオイケ「お邪魔します……」

アオイケ、促されるまま奥の席に着く

おじいさん、アオイケの向かいに座ってお茶を飲んでいる

おじさん、アオイケにお茶を持ってくる

アオイケ「ありがとうございます」

アオイケ「いただきます」

と、お茶を飲む

おじさん「登ってきたの」

アオイケ「あ、はい、背戸峨廊、行ってきました」

おじさん「登ってきた、あの沢」

アオイケ「はい」

おじさん「ひとりで」

アオイケ「ああ、ええ、まあ」

おじいさん「おお、大したもんだ」

おじさん「うん、大したもんだ」

ミズモリ、遅れて下山

アオイケを探しながら小屋の前を通り過ぎていく

アオイケ「そうですか」

おじさん「こんな若くて、ひとりで登るのは今までいなかったね」

おじいさん「大したもんだ」

三人、黙る

アオイケ「……ここは、食堂なんですか」

おじさん「あー、違う、あのね、前はそうだったけどね。もう何十年も前の話よ」

アオイケ「そうなんですか」

おじさん「親父が生きてた頃まではやってたよ、行列できるくらい」

アオイケ「へえ！」

おじさん「ほんとほんと、若い女の子たくさん雇ってね」

おじさん「電車が少ないでしょ、だからあの、電車待つ人がたくさんいて、その時間に」

アオイケ「ここで過ごすんですね」

おじさん「そう、暇つぶしで入ってくるのよ。その頃はだって誰も車持ってる人、少なかったから」

アオイケ「ああ」

おじさん「今もうね、向こうからあっちにすぐ通り過ぎちゃうけどさ」

アオイケ「郡山のほうに」

おじさん「郡山、きれいなもの、みんな若い人はきれいなほうに」

アオイケ「ああ」

おじさん「それで人がだんだん集まらなくなったから、親父が死んでたたんじやったんだけど。あれぜんぶこのあたりの写真」

おじさん、壁にかかっている写真を示す

アオイケ、写真を見上げる

おじさん「昔はもっと宿もあったのよ、今ぜんぶ閉めちゃってるけども」

アオイケ「そうなんですね」

おじさん「うん」

おじさん「あんたも郡山に行くの」

アオイケ「あ、いえ、いわきに泊まります」

おじさん「いわきならおれここのもう閉めて遊びに行こうと思ってっから、乗ってけばいいさ」

アオイケ「あ、ああ、ありがとうございます」

おじさん「うん、乗ってけばいいよ、いわきなら」

アオイケ「はい、ありがとうございます」

おじさん、おじいさんに向かって

おじさん「もう出るんだろ」

おじいさん「うん」

おじさん「な、うん、それじゃあ」

おじさん「戸締まりしてくるから」

おじさん、席を立てて店の戸締まりをはじめ

おじいさん、お茶を飲む

アオイケ、お茶を飲む

アオイケ、壁の写真を再び見上げ、眺める

おじいさん「よく登ったよ、大したもんだ」

アオイケ「あ、そうですか」

おじいさん「うん」

おじいさん「落ちなかったか」

アオイケ「滑りはしました」

おじいさん「うん」

おじいさん「その荷物で」

アオイケ「はい」

おじいさん「大したもんだ」

アオイケ、スマホを取り出して動画を探す

おじいさん「撮ってきたか、いろいろ」

アオイケ「はい」

おじいさん「ふーん」

アオイケ「あの、これって何ですか」

アオイケ、沢で見た小さい生き物の動画をおじいさんに見せる

アオイケ「これです、何だかわかりますか、あ、見えますか」

おじいさん「うーん」

おじいさん「モグラだよこれは」
アオイケ「モグラですか、カワウソじゃなくて」
おじいさん「うん」
アオイケ「モグラってこんなに小さいんですか」
おじいさん「うん」
アオイケ「そうなんですか…」

おじいさん「ヒビは見たか」
アオイケ「ヒビ」
おじいさん「うん」

アオイケ「ヒビ……？ は、見なかったです」
おじいさん「うん」

アオイケ「ヒビ」
おじいさん「うん、なら良かった」

おじさん、戻ってくる
おじさん「よし、もう行こうか」

おじいさん、立ち上がる
アオイケ「あれ、わあ、カッコいいですね、ウェアとスパッツ」

おじいさん「うん、おれ、だって自転車で来たからよ」
アオイケ「あ、おもてのロードバイク、そうだったんですね！」
おじいさん「うん」

アオイケ、駄菓子屋の玄関から自転車を見る
アオイケ「カッコいいなあ」

おじさん「車あっちだから」

アオイケ「はい」

おじいさん、ヘルメットをかぶり、自転車にまたがる

アオイケ、走り出した自転車を見送る

おじさん「車、乗っててね」

アオイケ「はい」

アオイケ、おじいさんを充分に見届け、車に乗る

おじさん、最後の戸締まりを終え、車に乗る

車が走り出すと、すぐにおじいさんの姿が見えてくる

通り過ぎ様に手を振るアオイケ

おじさん「あの人はどこでも自転車で行っちゃうんだよ、夏はとくに、あっちの街、こっちの街って、花火を見に」

アオイケ「えー、すごい」

おじさん「うん、でもあなたもすごい」

アオイケ「そんなにですか」

おじさん「うん」

おじさん「ヒビとか会わなかった？ マムシとか」

アオイケ「……あ、ヒビって、ヘビ。はい、ヘビは見ました」

おじさん「ああそう、マムシじゃなかった」

アオイケ「たぶん」

おじさん「マムシならすぐ逃げないとだめよ」

アオイケ「速いんですか」

おじさん「うん、まあ、速いのもそうだし噛んだら離さないし」

おじさん「マムシを捕まえてよ、焼酎につけるのね」

アオイケ「ああ、はい」

おじさん「あれ酒に入れて蓋して、三週間しても中で生きてるの」

アオイケ「えー」

おじさん「マムシ酒」

アオイケ「はい」

おじさん「見たの、ただのヒビで良かった」

アオイケ「はい」

アオイケ「嘸まれたら死にますか」

おじさん「そうだねえ」

アオイケ「ああ」

おじさん「スズメバチになら刺されたことあるけど」

アオイケ「え!？」

おじさん「ふふ、ここ五つくらい」

おじさん、ハンドルを持つ腕をさする

おじさん「あそこでよく遊んでたのよ」

おじさん、小川にさしかかって浮かんでいる船を示す

おじさん「ガキのとき友達が死んだわ」

アオイケ「マムシですか、スズメバチですか」

おじさん「いや、岩だね」

アオイケ「岩」

おじさん「うん、川の」

おじさん「あの家、見えるでしょ、あそこのうちからね、ボーンて川飛び込んで遊んでたの。
そしたらひとりが飛びすぎてね、川の奥のほう底に岩が出っ張ってるの知らなくて」

おじさん「頭打って、しばらく浮かんでこないからさ、あれえどうしたんだろつつって、近所
の人たち探してさ」

おじさん「ちょっと離れたところでようやく浮かんできたねえ」

車は山沿いをまっすぐいわき方面へ進む

アオイケ、窓から吹き込む風に顔や腕をあてる

おじさん「今あの青い車が曲がったところあるでしょ」

アオイケ「あ、はい」

おじさん「前まであの道はなかったのね、曲がらないですずっとまっすぐ続いていたの」

アオイケ「はあ」

車、その曲がり角へ至り、右折する

おじさん「ここができてからいわきにすぐ行けるようになったんだけどさ、そしたらみんなこ
こ曲がるようになっちゃって、人の流れがすっかり変わって」

車、さらに左折する

おじさん「あそこにピンクのビルが見えるでしょ、あれ農協だから」

アオイケ「ああ」

おじさん「うん、前はあのあたりが人いっぱいいたの。今はもう車は行かないね」

アオイケ「新しい道ができると」

おじさん「うん」

アオイケ「生活が変わっちゃうんですね」

おじさん「人の流れが、変わるもんだから」

アオイケ「ですね」

おじさん「こっち曲がると四ツ倉ね」

アオイケ「ああ」

おじさん「四ツ倉は行ったことあるかい」

アオイケ「ないです」

おじさん「そうか」

車、四ツ倉へは向かわず、いわきへまっすぐ進む

おじさん「ここはもともとパチンコ屋だったなあ」

アオイケ「へえー」

おじさん「いつのまにか葬儀屋になってら」

おじさん「パチンコ屋が減っちゃって」

おじさん「遊ぶ人間がないから」

おじさん「あ、また葬儀屋だ」

アオイケ「……食いつぶぐれないですもんね」

おじさん「ぜったい死ぬからねえ」

アオイケ「はい」

おじさん「おれなんか妹に早く死んどけて言われてるの」

アオイケ「え」

おじさん「そのほうが面倒じゃなくていいからって、はっはっは」

アオイケ「えー」

アオイケ、笑う

おじさん「ほんとほんと」

アオイケ、そっと泣く

おじさんは上機嫌で運転している